

# 飲料の嗜好性とイメージに関する年齢および男女間の相違

香川県明善短期大学家政 川染 節江

目的 近年、若年層における炭酸飲料等の過剰な飲用は、糖分摂取過多となり肥満を誘発するなどの問題が指摘されている。このようなことは、食生活形態や食文化の形成にも影響が大きいと考えられる。そこで、飲料についての嗜好性とイメージに関し年齢および男女間の相違をアンケートにより調査し検討した。

方法 試料とした飲料は、コーヒー、紅茶、緑茶、抹茶、ウーロン茶、ミネラルウォーター類、牛乳、オレンジジュース類、コーラ類、スポーツドリンク類、栄養ドリンク類、ヨーグルト類の12種とした。嗜好性は、飲用状況、コーヒーと紅茶に用いる砂糖量、朝・昼・夕食後によく飲む飲料の3項目で調べた。イメージはS・D法により「古めかしい、女性的、値段が高い、日本風な、日常的、健康的、好き、気分が変わる、香りがよい、おいしい、あっさり、落ち着いた」の12の用語を用い「どちらとも言えない」を中心に、やや、かなり、非常にの左右対象の7段階で調べた。調査は1994年7月香川県内在住の10代以上の男女962名を対象に実施した。

結果 12種の飲用率は年代により異なり、コーヒーは20代から50代の間でよく飲用されており、緑茶は加齢に伴い飲用率が高くなるなど年齢差が見られた。若年層が多く飲用しているのはスポーツドリンク、コーラ類、オレンジジュース類、ミネラルウォーター類の順であった。コーヒー、紅茶には10代は砂糖をスプーン2杯以上入れる者が14~23%いるが20代以上では入れない者が多く、甘味離れの傾向が現れている。イメージについては年齢差が大きく、また抹茶を「たしなんでいる」率は女子で50代が25%、60代で34%あった。